

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『吾妻男仙伝枕』と業平
Author(s)	福岡, 依鈴
Citation	国文学攷, 244 : 31 - 43
Issue Date	2019-12-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049731">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049731</a>
Right	Copyright (c) 2019 by Author
Relation	



## 『吾妻男仙伝枕』と業平

福岡依鈴

はじめに

本稿で取り挙げる御客散人序『吾妻男仙伝枕』（明和三年〈一七六六〉成。以下、『吾妻男』）は、豆作という身体の小さい男が他人と魂を取り替えて色恋を楽しんだり騒動を引き起こしたりする物語が全篇を通して描かれる。身体の微小性と魂の入れ替わりの趣向を使用していることから、同様の趣向を用いる江嶋其磧『魂胆色遊懐男』（正徳二年〈一七一二〉頃刊か。以下、『懐男』）の系譜に連なる豆男物の一つであると考えられる。

この『吾妻男』の執筆動機について、序文では次の通り述べられている。

豆を得に賢の豆右衛門を焼陰門は、蒲団に有て泣しむ元。これ八文字屋が趣向の秀たるより生ず。二代男、是に次で妙作。腹の皮をよちらせたり。其後や、此術を請次者なし。よて此度、

跡目の口入仕侍りぬ。〈後略〉

はじめに『懐男』・江嶋其磧『豆右衛門後日女男色遊』（正徳四年〈一七一四〉頃刊か。以下、『女男色遊』）の主人公である大豆右衛門と作者不詳『栄花遊二代男』（宝暦五年〈一七五五〉成。以下、『二代男』）の名を挙げており、これらの作品を称賛する。そして、『二代男』以降、豆男物が板行されていないため、その趣向を引き継いだ『吾妻男』を執筆したと説明している。実際、『二代男』の後、『吾妻男』までの間に、身体の微小性と魂の入れ替わりの趣向を両方を用いている豆男物が板行された形跡は見られない。

また、『吾妻男』は、後続する豆男物でも度々話題に挙げられている。以下、言及が見られる箇所を掲げる。

いづれの御時にか、まめ男なんありけり。そのふみ五の巻二通り、鬼神ふしぎの妙作。凡夫のおよぶ趣向にあらず。夫より世下りて、二代男といふ、是も又妙に面白かりしかば、これら

に双ぶべくもあらずして思ひとゞまりしに、ちかき世に吾妻男といへる者出来なりしに、おかしきふし、新らしき事どもあれど、いにしへにくらべてはやゝ劣れり。(後略)(雁金その字序『色道修行男』(明和五年「一七六八」序)序文<sup>2</sup>)

此間聞出し豆休(稿者注)・『懐男』の主人公である大豆右衛門が法体した後の名より三代目の豆作、三河国八橋の辺りにて入贅して一女を儲たるよし聞およぶ。また男子をももふけたらんとおもふあいだ、先達て迎ひの人をさし越たるに、案に違わず色豆男をめし寄せたり。(後略)(寝ぼけ先生序『潤色栄花二代娘』(安永三年「一七七四」序)卷一の「豆の跡潰させまいと子孫の御世話」)<sup>3</sup>

『吾妻男』の次に成立した豆男物とされる『色道修行男』では、先行する『懐男』・『女男色遊』・『二代男』と比較する形で、「やゝ劣れり」と批判的に評価されている。この評価が影響しているのかどうかは不明だが、『色道修行男』本文では、『懐男』の大豆右衛門と『二代男』主人公の作蔵については言及が見られるものの、『吾妻男』の豆作の名が挙げられることはない。<sup>4</sup>

これに対し、『潤色栄花二代娘』では、『吾妻男』結末部で豆作が結婚したことを取り挙げた上で、その息子とされる豆之進を登場させる形で趣向が取り入れられている。<sup>5</sup>『色道修行男』よりは好意的な評価がなされているといえるだろう。このように、『吾妻男』は

後続する豆男物に影響を与えていると考えられる。

では、この『吾妻男』にはどのような特質があるのだろうか。佐伯孝弘氏は「豆男物の浮世草子―浅草や業平伝説との関係など」<sup>6</sup>で、豆男物と業平伝説の関連性について考察しているが、『吾妻男』については、次のような指摘を行っている。

豆男物の祖にして上方版である『浮世栄花一代男』で業平天神に祈願し主人公が霊力を得るという設定は、後続の『好色赤烏帽子』『吾妻男仙伝枕』で踏襲されている。(後略)<sup>7</sup>

『浮世栄花一代男』にある、主人公が業平天神に祈るという設定が、『吾妻男』にも継承されていると述べている。たしかに、『吾妻男』の巻一の一を見ると、豆作が業平天神に祈る描写が存在する。また、佐伯氏は、豆男物の趣向は、『伊勢物語』第二段にある「まめ男」から連想されて作られたとし、その根拠として『吾妻男』巻五の三の文章を引用している。<sup>8</sup>このように、『吾妻男』では、業平天神や『伊勢物語』の「まめ男」など、業平と関係がある事物について言及が見られる。

しかし、佐伯氏の論では豆男物全体を考察しているため、『吾妻男』における業平の要素について詳細な検討はなされておらず、業平の要素と作品内容がどう結び付くのかは明らかにされていない。『吾妻男』における業平の要素の性質がどのようなものか、本文の分析を通して考察を行う必要があるのではなからうか。

また、佐伯氏は『浮世栄花一代男』から業平天神の趣向が継承されてきたと述べているが、『吾妻男』では『浮世栄花一代男』について触れられていないため、直接的な影響があったかどうかは不明である。作品内容の比較をするのであれば、『吾妻男』序文で名が挙げられており、身体の微小性と魂の入れ替わりの趣向が共通して使用される『懐男』・『女男色遊』・『二代男』を用いるべきではなからうか。

以上のことから、本稿では『吾妻男』の中でも業平の要素が用いられている章の分析を行い、豆男物と業平の要素がどのように描かれているのかを明らかにする。その上で、『吾妻男』への影響が認められる『懐男』・『女男色遊』・『二代男』における業平の要素と比較を行い、本作の特質について考察を試みることにしたい。

## 一 『吾妻男』の梗概

はじめに、佐伯氏による『吾妻男』の梗概を掲げる。

江戸業平橋で蜷取りをする鈍作は、醜男で女に相手にされない。業平天神に祈願して蓬萊宮にいる豆休仙を訪ね、その跡を継ぐ豆作となり、他の男の体に移る仙術を授かる。豆作は、金持ちで新婚の町人や吉原で水揚げをする大尽、武士、木樵、歌比丘尼を買う男、隠居、葉屋の主人、破戒僧などに乗り移り、飲を尽くす。諸国色修行を志した豆作は伊勢参宮の途中、三河

八橋で自分より小さい女に出会う。斎宮を犯した業平と所縁の者は伊勢参宮は叶わぬと聞き、豆作は女と夫婦となり舍利粒ほどの娘を設け、その地で暮らした。

次に、業平天神に祈る描写がある『吾妻男』巻一の一と、佐伯氏が『伊勢物語』第二段からの影響を指摘した巻五の三の内容を掲げる。

○巻一の一「赤貝に縁のない業平橋の蜷取」

色恋の自由を願う鈍作は、豆休から豆男物の主人公が持つ能力を授かって色恋を楽しんだ作蔵を羨む。そして、自分も豆休に会えるように、産神である業平天神に百日間精進潔斎をして祈り続ける。満願の夜に業平天神の使いである飛梅の精が現れ、神通力で鈍作を蓬萊宮へ連れて行く。その後、業平から鈍作の願いを聞いたという豆休に出会う。豆休から豆男物の主人公が持つ能力を授かった鈍作は名を豆作に改め、江戸に戻る。

○巻五の三「紫の所縁女は杜若の精魂」

諸国修行中に伊勢参宮を志した豆作は三河国の八橋にたどり着き、その地で自分よりも小さい姿をした若い女性に出会う。観音堂に情交の相手を得られるように願っていたという女性は、豆作を自分の家へと誘い、そのまま情交を行う。情交の後、女性は、豆作が能力を得た経緯を知っていること、斎宮と情交を行った業平と縁のある人物は伊勢神宮へは近づけないことを説明し、八橋に留まるよ

うに豆作を説得する。豆作は女性の正体を訝しみつつも女性の家に住み、後に二人の間にはお賢おさとしという女の子が生まれる。

なお、『吾妻男』巻五巻末には、『栄花女世継枕』の出版広告がある。『栄花女世継枕』では豆作の娘のお賢を主人公とする構想があったと考えられるが、この作品が板行されたかどうかは不明である。

## 二 『吾妻男』冒頭部における業平と豆休

巻一の二「赤貝に縁のない業平橋の蛭取」には、豆作の産神として業平天神が登場する。『吾妻男』では業平天神をどのような存在として描いているのだろうか。

まず、巻一の一では、豆作が業平天神に祈る様子が描かれる。

〈豆作は、〉「むかし鎌倉雪の下の百姓、豆休仙とやらに術を乞請、生涯を栄花に散ぬとかや。我も一念力を以てせば、其作藏子に劣るべきや」と夙に起、沐浴齋戒、土神なれば外ともおつしやるまいとすぐに業平天神へぬかづき、「我大願成就なましめ玉ひ、豆休仙の魂魄のありかへ引合せたび玉へ」と、百日が間精進潔斎してかんたんくだき祈ける。不思議や満願の夜、雪転の人の形のような児忽然と顕れ、「止矣々々。我は是当社の末社、飛梅の精也。汝思ひせつたる事を神も憐み玉ひ、望のごとく豆休に引合せ得さすべし。渠今蓬萊宮にあれば、是からは道すじもむづかし。〈中略〉とてももの事に我にかの地迄送遣せ

との神勅也。いざ」といふて指出す梅枝にぶらさがれば、びうといふ音につれて、とある所へ落着ぬ。〈後略〉

豆作が業平天神へ百日間祈ったことで、その使いである飛梅の精が現れ、豆作を豆休がいる蓬萊宮へと連れて行ったことが記されている。この場面における業平天神は、色恋の自由を直接叶えるのではなく、その手助けをする存在として描かれている。

また、豆休の台詞でも、業平天神の名が挙げられている。

〈豆休は、〉「善哉〜ともいふべき出端なれど、そんな勿体くさい事は隙つぶし、只肝要のみ申なり。其方子が術を請たきたきの望、先達而平さまより御申越にて具に承り届ぬ。〈中略〉汝が執心他にことなれば、我跡目を讓べき」と一々伝授し、〈後略〉

豆休は、「平さま」から豆作の願いを聞いたと語り、豆作に豆男物の主人公が持つ能力を授けている。飛梅の精が「汝思ひせつたる事を神も憐み玉ひ」と述べていることも踏まえると、業平天神が豆作の願いが叶うように行動していることは明らかだろう。以上のことから、『吾妻男』における業平天神は、豆休のように直接姿を現したり能力を授けたりすることはないが、間接的に豆作の色恋の自由を叶える役割を担っていると考えられる。

## 三 巻五の三と謡曲「杜若」

『吾妻男』最終章である巻五の三「紫の所縁女は杜若の精魂」では、豆作よりも身体が小さい女性が唐突に登場し、この女性と豆作の交流を中心に物語が展開する。

まず、女性が登場する場面を見てみよう。

豆作も伊勢参宮の心懸にてへ中略へ行かたはらに石碑有。八ッ橋の旧跡となん。彼中將のから衣と詠じ玉ひし所なればと立寄見るに、蜘蛛の水もうづもれて、業平も観音堂の名にかはり、八ッはしの杭木かすかに朽残るさま哀に打詠めし折ふし、年のころ二八ばかりの嬋娟なる小女来り、「みづからは此あたりの者なるが、御覧のごとく微少の身ゆへ、誰有ッて妹背を語る人もなく、明暮閨の淋しきを、此御堂へ詣ふで歎きまいらせしかば、誠や大慈大悲の誓願むなしからず、今日御もとさまに御引合せの有難さよ。いざさせ玉へ」と我が勝手計ひつゝ、豆作が手を取り、むりやりに打つれ、半丁計行ば、幽玄たる扇をこえて彼深窓に伴なへば、〈後略〉

伊勢神宮へと向かう豆作は、八橋で身体の小さい女性に出会い、情交を持ちかけられた後に無理やり女性の家へと連れて行かれる。この女性の素性については、次のような言及は見られるものの、作中で明らかにされることはない。

〈豆作は、〉扱は豆休仙の落し胤にて、我を憐み玉ふと覚えたりと、しきりに愛情の迷ひと成、〈中略〉「御身の親は何人にて

渡り候や。迎もに納得づくで同穴にふしたし」といへば、娘いふ、「いやとよ、みづからは親もなく、兄弟とてもさぶらはねば、誰に憚るべからず」。豆作いよ／＼不審して、「然らば御身は木の股から生れ玉ふや。」「いかにも親なき故の御不審、さも覺し玉ふべし。草木無情とは申とも、石に精あり水に音有と申せば、有情非情も時に有、只紫のゆかり者と思し召せ。時節を以て我身の上もあかしまいらせん。左のみな心置玉ひそ。」

〈後略〉

豆作は女性を豆休の子孫であると推測し、親兄弟や身元について質問しているが、女性は、自分のことを「紫のゆかり者」であると述べるだけである。

このように、『吾妻男』巻五の三は、八橋を訪れた男性が正体不明の女性に出会い、女性の家に泊まるという展開になるが、これに酷似した物語が、『伊勢物語』を題材とする謡曲『杜若』で描かれている。

ワキ「是は諸国一見の僧にて候。われ此間は都に候ひて、洛陽の名所旧跡残りなく一見仕りて候。又是より東国行脚と心ざし候。〈中略〉急候間、程なふ三河国に付て候。又これなる沢辺に杜若の、今を盛りと見えて候。」〈中略〉シテ女「なふなふ御僧、なにしに其沢には休らひ給ひ候ぞ。」ワキ「是は諸国一見の者にて候が、杜若の面白さに詠め居て候、扱爰をばいづく

と申候ぞ。」女「是こそ三河の国八橋とて、杜若の名所にて候へ、さすがに此杜若は、名に負ふ花の名所なれば、色もひとしほ濃紫の、なべての花のゆかり共、思ひなぞらへ給はずして、取わき詠め給へかし、あら心なの旅人やな」〈中略〉女「いかに申べき事の候。」ワキ「何事にて候ぞ。」女「見苦しく候へ共、わらはが庵にて一夜を御明かし候へ。」ワキ「あら嬉しや、頓而参り候べし。」〈後略〉<sup>10)</sup>

東国行脚をする僧侶が八橋を訪れ、里の女（実は杜若の精）から八橋の杜若や業平について説明を受けた後、自分の家に泊まるよう提案されるという展開になっている。人物設定こそ差異は見られるが、旅の途中の男性が里の女の家を誘われる趣向は、『吾妻男』巻五の三と共通している。『吾妻男』巻五の三の章題に「紫の所縁女は杜若の精魂」とあることも踏まえると、この章は謡曲『杜若』の趣向を取り入れて物語を構成していると考えられる。謡曲『杜若』の杜若の精が、『吾妻男』の女性のモデルとなっているのは明らかである。

また、巻五の三には、『伊勢物語』の内容に触れている箇所もある。豆作が女性と情交をした後、伊勢参宮をしようとする豆作を女性を引き留める際に、次の通りその理由を述べている。

娘すがつておし止め泪を流し、〈中略〉「成程お許さまの御身のういさゝかに存じおりまして、御参宮の道をさゝへまいらせし

もわけ有事。いにしへ業平の卿齋宮を犯し玉ひしを、神慮にそむくいひにより、今以在原の性は伊勢の御かきに近付ケ玉はず。尤御身は其苗裔にあらずといへども、豆男の名はかの卿より起りし事なれば心根は同じき也。其意を知らで神垣に近付玉はゞ、一生をあやまり玉ふべし。」〈後略〉

女性は、昔業平が齋宮と情交をして神に背いたことで、在原姓の人物は「伊勢の御かき」に近寄れないとし、「豆男の名はかの卿より起りし事なれば心根は同じ」であるため、豆男である豆作が参宮をしたら「一生をあやま」ることになると述べている。佐伯氏も指摘したこの部分は、「まめ男」という語句が豆男物の由来となったことについて述べているだけではなく、『伊勢物語』第六九段にある男と齋宮の交流を基にした記述となっている。

このように、『吾妻男』巻五の三は、謡曲『杜若』や『伊勢物語』第六九段の趣向を複合的に取り入れた構成となっていると考えられる。佐伯氏は『伊勢物語』第二段の「まめ男」との関連のみを指摘しているが、この章自体が業平の要素の影響を色濃く受けているのは明らかであろう。謡曲『杜若』の杜若の精を想起させる女性が登場するのは、業平と豆男の関係性をより強調させるためではなからうか。

#### 四 『吾妻男』巻三の一における業平の要素の取り入れ

では、巻一の一や巻五の三以外でも、業平の要素が取り入れられている章はあるのだろうか。

卷三の一「奥入の町人は臍の下迄の御用達」後半では、豆作が武家屋敷の奥女中たちに浮人形と誤認されたことで煙草盆の引き出しに閉じ込められ、次のような危機に陥る。

〈奥女中は〉「サアさつきのうき人形を水へ放さうでは有まいか、ソリヤ面白からう」と引出し明けて取出し、すぐに鉢の水へ入れれば、豆作不思議に命は助けられ共、又水へ入にも遁るゝ隙なければ、爰を大事と船の柱に取付居たりしを、〈中略〉思はず水へさんぶと落、浮ぬ沈みぬ苦しむを、〈中略〉是が此世の切れめと見えて、既に水底に沈まんとする時に、「もう湿ったさうで動かぬ。ちと揚て干ませよ」とかんざしにて挟みあげ、火入の上へかざさるゝ。此時豆作息吹返し、あたりを見ればこはい□□<sup>（破）</sup>「火で責る歟、悲しやな。今日はいか成悪日ぞ、絶命爰に極つたり」と、浄土双六の大焦熱の罪人のやうに成て、

後生大事と取付しが、〈後略〉

豆作は鉢の水に浮かぶ船から落ち、溺れかけた上に、その後火入の上にかざされて熱さに苦しむことになる。船から落ちて溺れる趣向と、火で炙られる趣向が連続して使用されていることに、何か理由はあるのだろうか。

ここで、『伊勢物語』の東下りに関わる章の中に、水や舟と関わ

る章段と火に関わる章段があったことに着目したい。まず、『伊勢物語』第九段には、次のような場面がある。

猶ゆきく／＼て、むさしのくにとしもつぶさのくにとの中に、いとおほきなる河あり。それをすみだ河といふ。〈中略〉わたしもり、「はや船にのれ、日も暮ぬ」といふに、のりて渡らんとするに、〈後略〉<sup>1)</sup>

『伊勢物語』第九段では、男が隅田川を渡るために舟に乗っている。この後、『伊勢物語』の男は無事に武蔵国に辿り着くが、佐伯氏によれば、浅井了意『江戸名所記』（寛文二年（一六六二））の「牛島業平塚」の項に、業平は東下りをした後に都へ帰る時、乗った舟が破損してそのまま溺死したという説が掲げられているという。<sup>2)</sup> 浅井了意が取り挙げていることを踏まえると、近世にはこの説が広く知られていたと考えられる。豆作が舟から落ちて溺れるという展開は、業平が舟から落ちて溺死したという近世期の俗説から趣向を得ているのではなからうか。

また、『伊勢物語』第二二段では、男が野焼きに巻き込まれそうになる場面がある。

むかし、男ありけり。人のむすめをぬすみて、むさしのへあてゆくほどに、ぬす人なりければ、くにかみからめられにけり。女をば草むらの中にきて、にげにけり。みちくる人、「この野はぬす人あなり」とて、火つけむとす。〈後略〉

男は女を盗んで逃げる途中、追手によって隠れている野に火をつけられそうになっている。状況は異なるが、場所が武蔵国と設定されている点、火に燃やされそうになるという点は『吾妻男』と共通しているといえるだろう。

また、石原昭平氏によれば、東京都東久留米市や埼玉県などに業平が野焼きに遭い、逃走、あるいは追手に捕縛される伝承が残されているという。<sup>13)</sup>先に述べた『伊勢物語』第九段に関わる俗説と同様に、このような伝承が近世期では広く知られていたのではなからうか。『伊勢物語』第二二段の趣向が、豆作が火に炙られる趣向へと発展した可能性はあるだろう。

以上のように、『吾妻男』巻三の一は、『伊勢物語』の東下り章段や、それを基にした業平の伝説から趣向を得ていると考えられる。業平が隅田川で船から落ちて溺死したという伝承と、業平が武蔵野で火責めに遭ったという伝承が、豆作が浮人形用の船から落ちて溺れ、その後火に炙られるという展開へと変換されたのではなからうか。

なお、豆作がこのような苦難に遭った理由について、巻三の一と巻三の二「貧すれば病症も永々の浪人」では次のように述べられている。

〈箱の中に閉じ込められた豆作は、不慮の事にて今日今日の只今此所に命を果すはそも何のむくひぞとつく、おもへば、先日はからずも尼を破戒させしが、天帝其罪を許し玉はず、は

やくも罰し玉ふと覚ゆ。〈後略〉(巻三の一)

豆作は大なる災難にあひ、所々焼たゞれぬれ共、陰茎の恙なきこそ此上の仕合なれ。おそろしや、豆休仙のいましめを忘れし事、向後急度慎むべしと療養の内、〈後略〉(巻三の二)

巻三の一では「先日はからずも尼を破戒」した罰、巻三の二では「豆休仙のいましめ」を守らなかった罰だとされている。

前者の「先日はからずも尼を破戒」した出来事は、巻三の一の前章である巻二の三「女鳴神に似た滝野川の庵室」で描かれている。この章で情交の相手となる尼について、巻二の三では次のように記されている。

〈樵夫と魂を入れ替えた豆作は、御無心ながら、たばこの火一ツ御かし候へ」とやりかけたれば、「そこに火打箱が有から、打て吞しやれ」と木で鼻こくつたやうにいふて見向もせず、一心称名にたゆみなく、常念恭敬とこしなへに、或ときは観念の窓に諸仏の摩頂をうけ、講讃の庭には聖衆の来臨をも拝みかねまじき客躰也。〈後略〉

豆作は情交に誘おうと尼に話しかけるが、尼は豆作に目を向けることもなく、ひたすら精進に励んでいる。

また、豆作と情交した後、尼は次のように述べる。

〈情交の後、尼君も起直り、「十七年来の戒行を、よふも一時に破らせし恨めしさよ」と宣ひてはたと白眼し、〈後略〉

この台詞から、尼は一七年の間、戒律を守って生活していたことが分かる。尼が本来は情交を許されない人物として設定されていることは明らかであろう。戒律を一七年間守っていた尼と情交をして破戒させたため、豆作は卷三の一で命の危機に陥るのである。

また、卷三の二の「豆休仙のいましめ」は、卷一の一で豆休が能力を授ける際に伝えた忠告を指していると考えられる。

「かまいて邪淫を慎むべし」といってねんごろに宣ひ、御一字を被下、則豆作と名乗せ、何やらん土砂の様なるものをふりかけしに、〈後略〉

豆休は豆作に対し、必ず邪淫を慎むようにと伝えている。この忠告を踏まえると、「豆休仙のいましめを忘れし事」も、卷三の三で尼と情交をしたことを指していると考えられる。

さて、卷三の一で豆作が苦難に遭う原因となった卷二の三の尼であるが、戒律を守るべき身分であるにもかかわらず、主人公と情交を行うという点は、『伊勢物語』第六九段に登場する齋宮の人物設定と相似している。以下、『伊勢物語』第六九段の男と齋宮が密会する場面掲げる。

二日といふ夜、おとこ、われて「あはん」といふ。女もはたいとあはじともおもへらず。〈中略〉をんなのねやちかくありければ、女、人をしづめて、ねひとつばかりに男のもとにきたりけり。おとこ、はたねられざりければ、とのかたを見いだ

してふせるに、月のおぼろなるに、ちいさきわらはをさきになつて、ひとたたり。おとこ、いとうれしくて、わがぬるところにゐていりて、ねひとつよりうしみつまであるに、まだなに「ともかたらはぬにかへりにけり。〈後略〉

齋宮である女は情交を許されていないため、人目のない夜に男の元へ訪れている。『伊勢物語』では、男が齋宮と情交をしたかどうかは明らかにされていないが、細川幽齋『伊勢物語闕疑抄』（文禄五年（一五九六）成）では、この部分について次のような注を付している。

たしかに逢奉るとかゝず〈中略〉、されどもあひ申たる事はありぞしつらん。さるにや高階氏は齋宮腹とて、今に此氏は参宮不<sup>レ</sup>叶<sup>二</sup>云々。高階峯緒子師尚、実者業平の息なりといふ。<sup>16</sup>

男（業平）と齋宮が本当に情交をしたのかどうかは明言を避けているものの、高階峯緒の息子とされる師尚は、実は齋宮が妊娠した業平の子だという説を紹介している。『伊勢物語』第六九段の出来事を史実とつなげていることには留意しなければならないが、男（業平）と齋宮が情交した説があったことには着目すべきだろう。なお、この説は北村季吟『伊勢物語拾穂抄』（寛文六年（一六六六）成）でも引用されているため、近世期にも広く知られていたと推測される。

また、第三節でも述べた通り、『吾妻男』巻五の三でも、業平は

齋宮と情交したと記されている。『吾妻男』の作者も、業平と齋宮が情交をしたと認識していたのであろう。『吾妻男』巻二の三の尼は、『伊勢物語』第六九段の齋宮を基にしているのではなからうか。

このように、『吾妻男』巻二の三・巻三の一では、『伊勢物語』の男すなわち業平の行跡と類似した出来事を豆作が経験していることが分かる。齋宮との情交や業平の伝承を彷彿とさせる展開を取り入れることで、業平と豆作を重ね合わせようとしたのだと考えられる。<sup>15)</sup>

## 五 先行作における業平の要素

ここまで、『吾妻男』における業平の要素について考察してきたが、先行作である『懐男』・『女男色遊』・『二代男』では業平の要素とのつながりは存在するのであろうか。

まず、『懐男』・『女男色遊』では、業平や業平天神が中心となる章は存在せず、関連性も見られない。また、「豆男」という呼称は『懐男』では用いられておらず、『女男色遊』結末部である巻五の三「願ひの叶ふ世に相生の友白髪」の目録題に、「色遊の世の中実人のよいまめ男」と記されているのみである。豆男物の趣向に『伊勢物語』第二段の「まめ男」が関わっているとしても、『懐男』・『女男色遊』では、業平の要素との関連性が希薄であると考えられる。

これに対し、『二代男』序文では、豆男物の変遷について言及している。

詩経に君子をまめやかなると云より、業平をまめ男と伊勢が物語を作り、又夫を小粒の大豆にとりなせし八文字やがまめ男の前後の秀文妙作も、〈後略〉<sup>17)</sup>

『二代男』作者は、『詩経』の言葉から『伊勢物語』の「まめ男」という言葉が生まれ、「八文字やがまめ男の前後の秀文妙作」、つまり『懐男』・『女男色遊』では、「まめ男」を豆のように小さい男という趣向に変換したと述べる。

また、佐伯氏によれば、『二代男』巻五の三「初旅に辰日門出吉の品川」に、業平天神とのつながりがあるという。<sup>18)</sup>この章では、品川の遊女に通う男を戒めるため、作蔵が次のように男へ告げる。

〈作蔵は〉提たばこ盆の取手へ飛上り、声はりあげ、「暫々」と海老蔵掛りにいふ。〈中略〉「我は業平の末社の神也。〈中略〉此後暫通をやめ、女房にも心を休させ、女郎にも実相をたてさせ遣べし。行末は女郎も汝も、ともに延命長久に守てやらむ。元まめのいきさつじやに依て、大豆ほどな姿になつて、神使をまめやかにしめす。うたがふ事なかれ」といへば、〈後略〉

作蔵は「業平の末社の神」と名乗り、男を説得している。「元まめのいきさつじや」や「まめやかに」のように、「まめ」という語句が頻用されていることを踏まえると、業平天神だけでなく、『伊勢物語』の「まめ男」も意識しているといえるだろう。

このように、『二代男』では、序文と巻五の三に、豆男物と業平

の要素のつながりを見出すことができる。特に、『二代男』序文で「まめ男」を「小粒の大豆にとりな」したと述べられていることには着目すべきだろう。『吾妻男』巻五の三にある「豆男の名はかの卿より起りし事」という設定は、『二代男』序文から引き継がれたのではなからうか。

ただし、『二代男』巻五の三の「業平の末社の神」という発言は作威の虚言であり、作威と業平天神にはつながりが存在しない。そのため、『吾妻男』のように本文中で業平天神、あるいはその使いが登場したり、業平本人について言及されたりすることもない。

以上のように、先行する豆男物では、目録や序文で『伊勢物語』や業平との関係は認められるが、本文中ではその関係を強調していないことが分かる。『吾妻男』の特質は、豆作の旅の始まりと終わりに業平の要素を関連付けることで、豆男物と業平に結び付きがあることを明確にした点にあるといえるのではなからうか。

### おわりに

『吾妻男』では、巻一の一で業平天神を重要な存在として描き、巻五の三で『伊勢物語』を基にした謡曲「杜若」の趣向を中心に物語を構成している。そして、巻三の一では業平の東下りに関する伝承を趣向として用いている。『吾妻男』は、本文中で業平の要素を多く取り入れることで、先行作である『懐男』・『女男色遊』・『二

代男』以上に豆男物と「まめ男」である業平の関わりを強調していると考えられる。題名に『吾妻男』という語句を使用したのも、東下りをした業平を想起させるためであろう。

なお、『二代男』や『吾妻男』で述べられた業平と豆男のつながりについては、後続作の『潤色栄花二代娘』でも序文や本文に言及が見られる。

今はむかし、奈良京春日の里に豆男かりに往けり。是なん豆の親玉なるべし。夫より豆男豆女の枝葉一粒万倍わくがごとく、  
〈後略〉(『潤色栄花二代娘』序文)

尽せぬ神の御恵仰ぐも恐れ、在原の流を汲し豆男、猶其跡をあふ坂山のさねかづら、人に知られず狂ひ歩行しお豆も浅草観世音の霊夢著し。〈後略〉(『潤色栄花二代娘』巻一の一)

春日の里の豆男が「豆の親玉」であること、豆男や豆女が「在原」の流れを汲んでいることが記されている。『吾妻男』と『潤色栄花二代娘』との間に成立した豆男物(『色道修行男』・『潤色栄花娘』・『潤色栄花娘道中之巻』)ではこのような記述は見られないため、『潤色栄花二代娘』の豆男と業平につながりがあるという設定は、『吾妻男』から引き継がれていると考えられる。豆作の息子とされる豆之進が登場することも踏まえると、『潤色栄花二代娘』は『潤色栄花娘』の続篇として執筆されているが、実際は『吾妻男』からも強い影響を受けているのではなからうか。『吾妻男』と『潤色栄花二

代娘』の関係性については、今後も考察を行う必要があるだろう。

注

(1) 『吾妻男』の諸本は、国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」(<http://basal.nij.ac.jp/~koken/>) によれば、京都大学附属図書館大物本(全巻)に所蔵が確認されている。本稿における『吾妻男』の引用は、右の伝本に拠った。

京都大学附属図書館大物本『吾妻男』(請求番号…四・四二ノア/一)の書誌は、次の通りである。

書型、横本、五巻五冊。刊本。縦一三・二cm、横一九・六cm。外題、表紙左肩に題簽「吾妻男仙伝枕 一(一五)」。目録題、「吾妻男仙伝枕巻之一(一五)」。

内題、「吾妻男仙伝枕巻之一(一五)」。

序、巻一にあり。末に「野暮店住御客散人書」との記載あり。文末に「明和三年/戌 正月」とあり。跋、なし。末尾に「仙伝枕後篇采花女世継枕」の出版予告あり。

引用に際し、句読点は私に改め、適宜濁点・半濁点を施し、振り仮名は省略した。また、引用中に私に施した注記は◇に、会話文は□に入れた。他の文献の引用についても同様である。

(2) 『色道修行男』の引用は、天理大学附属天理図書館蔵本に拠った。

(3) 以下、『潤色采花二代娘』の引用は、東京大学総合図書館霞亨文庫蔵本に拠った。

(4) 『色道修行男』における先行作の趣向の取り込みについては、拙稿『色道修行男』試論―巻三における趣向の利用について―(『国文学放』第二三九号、二〇一八年九月)で考察を行っている。

(5) 『潤色采花二代娘』の豆之進については、拙稿「主人公の設定から見る『潤色采花二代娘』」(『国文学放』第二四三号、二〇一九年九月)で考察を行っ

ている。

(6) 飯倉義之氏編『怪異の時空2 怪異を魅せる』(青弓社、二〇一六年)所収

(7) (6)に同。七四頁。

(8) (6)に同。七六頁。

(9) (6)に同。七〇頁。

(10) 西野春雄氏校注『新日本古典文学大系 謡曲百番』(岩波書店、一九九八年)。三〇〇頁。

(11) 以下、『伊勢物語』の引用は、早稲田大学早稲田図書館蔵『伊勢物語拾穂抄』(請求番号…文庫三〇/〇〇九九)の電子データに拠った。

(12) (6)に同。七八頁。

(13) 石原昭平氏「葉平・小町を歩く―武蔵野における新資料を中心に―」(『国文学解釈と教材の研究』第二八巻九号、一九八三年七月)。

(14) 『伊勢物語闕疑抄』の引用は、早稲田大学早稲田図書館蔵『伊勢物語闕疑抄』(請求番号…イ〇四/〇三二六三/〇二〇八)の電子データに拠った。

(15) 『吾妻男』には、本稿で取り挙げた章以外にも『伊勢物語』からの影響が疑われる箇所がある。

『吾妻男』巻五では、雌の狐にこれまでの行動を咎められた豆作(巻五の一)が、諸国修行を志して箱根温泉に立ち寄り(巻五の二)、最終的に三河国八橋へ辿り着く(巻五の三)様子が描かれている。各章の内容に関連性はほとんど見られないが、自らの行動を咎められた主人公が東から西へ向かって旅をするという展開は、『伊勢物語』の東下りを意識している可能性がある。

なお、巻五の一の狐には大工の男に恋をしているという設定があるが、荒川結香氏「中世異類女房譚の一形成―お伽草子「木幡狐」を中心に―」(『国文目白』第五四号、二〇一五年二月)によれば、『伊勢物語難儀注』や『曽我物語』に、玉津島明神の使いである狐と葉平の恋愛が描かれた説話が

引用されているという。相手となる人物は異なるが、狐が人間に恋をするという要素は共通するといえるだろう。『吾妻男』巻五の一の狐は、説話に登場する玉津島明神の使いの狐が基になっているのではなからうか。巻五については、今後も業平や『伊勢物語』とのつながりから考察を行う必要があると考えられる。

(16) 八文字屋本研究会編『八文字屋本全集』第五巻（汲古書院、一九九三年）三〇七頁。

(17) 以下、『二代男』の引用は、花咲一男氏校訂『栄花遊二代男』（太平書屋、一九八二年）に拠った。

(18) (6) に同。七四頁。

〔付記〕

『吾妻男』の複写をお許し下さった京都大学附属図書館に対し、御礼申し上げます。

— ふくおか・いすず、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学 —